８．その他の日常活動

（１）学力保障の取組み

３年生は進路の選択の問題がある。全ての子供たちに自分の希望する道に進ませたいと思いつつも現実の問題としては困難な問題も多い。同和問題学習と学習との両立、というのも変な言い方であるが、部活動と学習の両立と同じような気分であった。同和問題学習に全力を尽くすことは、自分を大切に生きることでありこれからの生き方を考えることである。そのことは直接的には進路の問題であり、そして自らの学力をつけることに結び付く。

私たちは学年当初より学力保障の問題について考えた。それは単なる「補習」ではなく生徒のやる気を喚起しつつともに学力をつける意味を考え実践していきたいというものである。１年間を通して実施したい、またそのためにも私たち教師の過大な負担にならないようにするとともに子供たちの時間を圧迫しすぎるものでも困る。そのような配慮から、始業までの３０分間を早朝学習ということで取り組む事にした。

当初の約束事は次のとおり。

＊　時間は７：３０より８：００まで。

＊　場所は会議室。

＊　教科は５教科。１教科につき基本と応用の２種類のプリントを用意し、生徒が自主的に取組み、わからない点を質問する。

＊　参加については強制でもなければ、個別に進めることもなく、まったく生徒の自主的な判断の任せる。

以上のような申合せのもと４月１５日よりスタートした。

次は、早朝学習１週間後の「ねんりん」の記事である。

【既に連絡をし、今週月曜日から実施している早朝学習は参加者が多いため、３Ｃに場所を変更します。７時２０分から８時までプリントを中心にやります。これは補習でも何でもなくみんなの自主的な学習を先生が手伝いをするということですから、そして朝早いですからみんなに進めるというものではありません。朝早く起きる分、自分でやった方が能率が上がるという人もある分けです。朝早く来て、一つでも二つでも得をしてくれればという気持ちです。冬になっても続けられるかどうか、先生の方が息切れしないか心配なんですができるかぎりやってみようと思います。参加しようと思う人は来てみてください。しかし、人数は一つの教室に入るくらいですからあまり多くなれば制限するかもしれません。】（ねんりん４月２０日　１８号より）

このよう形で始まった早朝学習は参加者が増え１学期の後半は２教室を当てた。私たちの来るより早く登校して職員室の前で待っている姿は３学期の終わりまで

続くことになる。時間も夏場は７時スタートになる事も多くなる。早く登校して職員室があくのを待っていた生徒は私たちがプリントの用意をしている間、職員室の掃除をしてくれることも多く子供たちと自然な形で話の出来るいい機会にもなる。２学期に入ってからは時間割を組むようにし、３年全職員が当たるようにした。月（数）、火（国）、水（社）、木（理）、金（英）、土（数または理あるいはとんだ教科）という組みかたにする

この形で３月７日までつづけることが出来た。

自主的な参加にしたためにどうしても成績の下位の子が居ずらい雰囲気ができてくる。それを避けるために担任からの子供への働きかけはもちろん家庭にも協力を要請することもあった。また既に述べたようにランクの異なるプリントを用意することも欠かせない。Ｓ先生はどうしても参加させたい一人の生徒については何度も家庭に足を運び参加を促していく。

特別な行事のある日以外は－平常の授業の行われる日は－必ず実施した。一年間を通して平均すれば一日４０人くらいの参加である。全体の２０％強に当たる。

年間を通して参加した生徒の中には城東高校北島分校で働きながら学ぶ進路を選択したＫ子もいる。どんな天候の日も休むことなく参加した。成績は大きく向上することはなかったが彼女の根気や粘り強さに目を見張る思いをさせられた。また、推薦や私立高校合格ですでに進路の決まった生徒も最後まで参加するものが多かった。単なる学力をあげることだけでなく一つの生活の柱として子供たちなりにこの早朝学習を位置付けていたように思える。４月の家庭訪問では「早朝学習に参加するようになって家庭学習の時間が増えました。」という声を聞いた。一つの動機付けになったのだろうと思う。

『朝の早朝学習も寒くなって起きづらくなってきたけれど慣れました。午後の補習の時間も眠くなりません。やはり体も精神も「頑張る」と働きかけているからでしょう。授業中も真剣な友達なんかを見ていると「あの子も頑張っている、よし、私も」と思い元気がつくのです。だれだって今の時期は苦しいけど逃げてはいけない。現実がそこ、すぐそこに迫っているから目をつむってはいけない。しっかりと現実を見据えることが大事だと思う。』

『最近、朝起きるのがすごくつらいです。だから早朝学習もいやになってきます。でもそんなとき朝早くから来てくれる先生や、いつも起こしてくれる母のことなどを思うと「今日も行こう」という気になってきます。後少しがんばりたいです。』

これは受験を間近に控えた生徒の「あゆみ」である。早朝学習は私たちにとっても苦しいものであった。正直言って「もう、やめよう」と思ったことも何度かある。しかしそれを乗り越えることが出来たのは寒い日も暑い日も私たちが登校

する前から登校し職員室の前で待っていた子供たちの姿である。

（２）書くこと

これについては昨年度の「峠を越えて」に述べた。今年もまた同じような取組みを進めていったということで詳しくは省略したい。

私たちは「書くこと」「話すこと」を重視していった。それ意外に自己を表現する方法がない。自己を表現することなしには同和問題はもちろん身の周りの問題は解決していかない。その「書くこと」の指導の柱になっていったのは自由作文と「あゆみ」の活用である。

自由作文は５２０字でつきに一回テーマを決め、あるいは自由に書かせそれを教室に掲示したり「ねんりん」に掲載していく。また、全体授業の後でもかならずその授業に関係をした感想や思いを書かせるようにした。「あゆみ」の効用についてはいまさら改めて述べるまでもない。とくに森口先生は普通のノートを「生活ノート」として字数に制限なく思ったこと、感じたことを書かせていた。ときにはＢ５版のノートに３ページにわたっての記述があったと聞いている。家庭での勉強を終えて書き初めても１時間３０分もかかったとうれしそうに話す顔をみたとき、子供たちは決して書くことが嫌いなんじゃない、ということを確信する。自由に書かせそれに対する教師のコメントを必ず加えていくならば子供たちか書くようになっていくものである。卒業を間近かに控えても机にかが見込むようにして「あゆみ」を書いている担任の先生方の姿があった。

自由作文の一部をいくつか紹介する。

＊　３年生全員で合唱した「友よ」。あの曲は私はもう少しで泣きそうでした。２年生からずっと取り組んできた同和問題学習。信頼と友情を深めたこの期間。私たちはこのことを決して忘れないと思います。うしろで私たちが歌う姿を見ていた人が目をまっ赤ににして体育館からでてきたということを母から聞きました。それを聞いたとき「私たちが何か訴えようとしたことをわかってくれたのかなあ」と思いました。１，２年生や他の先生方、そしてＰＴＡの人たちはどんな思いで私たちの歌を聞いてくれたのだろうか、どんな感想を持ったのだろうか知りたくなりました。一生懸命聞いてくれている１年生がいました。

＊　今日、資料を学習して本当に故郷を隠さなければならないということは、いやなことだしずっと心につかえると思いました。Ｉさんが勉強してないから差別したり、恥ずかしくなるとか、僕等は勉強しているのだから真剣にしたいとかいっていました。その時思ったのは国にたいしても腹が立ちました。憲法にも人権の尊重とか平等とか書いてあるのにこんな大きな問題に無関心だったことです。今はだいぶ良くなってきているとは思うけど、なんかそれは心のなかにしまっていわないからそう思うんじゃないかなとも思えます。もっと多くの

人にこの全体学習みたいなことをやってほしいし、見に来て欲しいなと思いました。また、そういうところがあればぜひ見に行きたいと思います。またもとに戻りますが、故郷は僕らの思い出深い土地であって、何よりも心強いし僕等の最高の場所なのに、その故郷を言うことによって差別されたり自分を苦しめてしまうような、こんな故郷はいらんと思わせるような場所になってしまう。どうして故郷の土地で差別するのか本当にはがゆいです。

9．言葉を胸に刻んで

私たちは子供たちとともにこの２年間同和問題学習に取り組んできた。それらの学習の中から忘れられない言葉がでてきた。本を読めばいくらでも目にする言葉であり、決して目新しいものではない。しかし、ある状況の中である子供があるいは先生方が「借物」でなく自分の言葉として出していったことは今もなお鮮明にその時の状況とともに心に刻み込まれている。そのいくつかを紹介したい。

体が熱うなって……

今年度３回目の全体学習が５月１７日にもたれた。佐野先生の「きず跡」の公開授業があり、続いて森口先生による全体授業が行なわれた。（この授業については本冊子に収録しある。）その場で一人の女子の発言がきっかけになって全員が必死になって友の発言を聞き考えていこうとする。「うちの母や父は、部落の人と結婚したら汚れる、というんです。」そういった意味の発言であった。家庭ではいろいろな発言があるに違いない。しかし今までは自分のことは、まして両親の差別心について話されることはなった。いわば、暗黙のうちに心の中に留めていることを了解していたということであろう。それがこの発言によって崩されるようになった。多くの発言があった。その時の一人の男子Ｒ・Ｉの発言の一部である。Ｉはどちらかというとそれ迄の同和問題学習には無関心な方であった。それが「燃えた」。この「熱うなる」という言葉はそれ以後の全体学習で子供たち自身によってよく引用されるようになっていく。それはＩのこの言葉がでてきた思いの中に本当のものを感じとったからであろう。その後のＩは先頭にたって取り組むというまでにはなっていないがこの言葉によって彼自身が一つの階段を上ったことは確かである。

「今日一番初めに手を挙げて発表できた。前にＩ君がいっていた「熱くなる」という言葉が僕の心にはっきりと感じられた。今までで初めてだった。こんなに熱くなって発表したいと心から思ったのは。今までの自分とはまったくかけ離れ

たような気分だった。なんか今日それ迄の自分が情けなく感じられた。…」

これは次の全体授業のときのNの言葉である。

おまえらに何ができるんな！

「今日の公開授業で、こんな授業したほうがいいか、せんほうがいいかとか言っていたけれど僕はしてほしくないです。しんだいとかいうのでなしに、地区でない子が3分の2位発表してすごくいいと思うけどその中で「部落の人」といわれるのが、僕はつらい、くやしいと思うこともある。そのたびに「おまえらに何ができるんな」と思ったこともよくある。僕は公開授業をしたあとは、とてもよかったなということは、はっきり言って一度もないです。」

地区出身のS・Iの言葉である。全体学習の場でだされたものではない。何度か全体学習が持たれその感想を書いたときにでてきた言葉であった。いくら言っても現実はどうにもならない。みんな口先だけじゃないかという不信感といらだち。また一方では自分がなんとかしなくてはどうにもならないんだという決意も感じられるように思うのだ。全体の場で同和問題が議論されていくことは時には部落の子供たちにとってはたまらないことでもある。「みんなが真剣に考えてくれることはわかるが、それでも部落という言葉が出る度に一把ひとからげにされているようないやな気分になる。」という言葉もある。この話しを地区の人にしたことがある。「先生、それは地区の子にとっての本音の部分でよ。」と言われた。例えばもう一つ地区外の子の言葉「私は地区出身じゃないから部落問題について不熱心だと言われたら腹が立つ。私は地区の友達のためにやっているんじゃない。自分自身のためにやっている。」この2つをどう繋なぎあわせたらよいのか。

私じゃないと一体だれが私の中の差別心をやっつけられるんでしょう。自分でなきゃだれが自分の思っていることを他のだれかに伝えられるんでしょう

そしてこの後次ぎのような言葉が続く。

私は何かこの頃「私」が世界を変えれると確信してきました。なんかとんでもないような、絶対無理ようなことなのに、なんでしょうこの自信は。大人になったらそういう仕事につきますから、私。」

子供たちに全体の場ではなすことの意味を繰返し説いてきた。しかしそれらはまだ「理屈」という感じがしないでもない。そんなときのY・Oの言葉である。学年同和問題意見発表会のときにM子が部落宣言をした。それに関連して同じ地

区出身のＴ・Ｍの次のような意見がある。（Ｔ・ＭはＭ子の従兄弟になる。）『私はＭ子さんが意見発表するときとても緊張しました。学習会でいろいろ話し合ったからだと思います。本音を話してくれる人の発表のときはとても考えさせられました。そして今日思ったことはだまっているのが一番悪いと思いました。答えが返ってこないほどつらいことはありません。やっぱり、同じことを誰かが言っても「私もそうです」というように発表していきたいです。「同じだからいいや」と思っていてもわかっているのは自分だけでたの人には何も伝わらないから。みんなを信じて頑張っていきたいです。いつかみんなの前で、私の思いや苦しんでいることを聞いて欲しいと思いました。』そしてこの生徒は自分の学級で自分をさらけ出していく。意見を出していくこと、自分を変えるということを子供たちはきちんとつかんでいるように思える。

先生、なんで学習会の通知こそこそわたすんですか。何で一言、頑張って学習会行きよ、っていわんのですか。

本誌、佐野先生の「生徒とともに学ぶ」に詳しい。本校では学習会の通知は担任の手を通して配布される。その場ですぐ封を切り中身を確かめる生徒、さっとカバンの中に隠すように入れる生徒と様々である。学習会の案内は午後の学活の時間には校内放送で流されるなどしてはいるが個々の生徒については学習会に参加していることを隠すようにする生徒もいた。そのような現実を変えるための私たちの同和問題学習ではあったが一気に解決という分けにはいかない。この問題が解決するということは部落の子供たちが立ち上がることと同じ意味を持つ。そのような現実の中で私たちの学習会の通知の渡し方は子供によって異なった。全体の場で読み上げて手渡すというまでにはいたっていない。部落の子供に自分の置かれた立場の自覚と立ち上がることの重要性を説きながら一方においては手紙を裏返して渡していたりした。これは私たち全てに通じることである。と言いながらも、それじゃすぐ全体の場で渡すことの方がよいのかというと少し違ってくるのではないか。このＴ・Ｈの発言は早く堂々と渡せるようにして欲しいということだと受け止めるべきであろう。コソコソ渡さざるを得ない状況の中に私たちの同和教育への取組みの甘さ、弱さがでてきているのだということである。現に何名かの生徒についてはそれ迄「こそこそ」渡していたものを堂々と渡せる状況だできていった。Ｔ・Ｈは昨年までは自分の立場を自覚していたもののまだ積極的に取り組もうとする姿勢は見られなかったが、今年佐野先生のクラスになって大きく成長した生徒である。その一つの証がこの発言であるとも言える。

私たちの周りにいる丸岡さん

この言葉が初めてでたのは生徒だったのか私たち教師であったのかはっきりしない。全体学習の中で本音だでるようになり、板野郡中学校同和教育研究大会が本校で持たれようとして、丸岡さんの「同和教育への希い」を資料として取組み始めたときに出てきた言葉である。もしかすれば、その頃御教えをいただいた石原先生から聞かされた言葉かも知れない。いずれにしても、生徒が全体学習の中でこの言葉を使ったことは確かである。

「同和教育への希み」は丸岡さんが差別の中から立ち上がっていく様を講演という形で話されたものの記録である。それは本誌にも収録してあるがその記録は部落ち子供たちにとって何よりも力強いものであり、地区外の生徒にとっては差別のもつ意味を改めて考えさせられるものである。

しかし、私たちの周りを見れば丸岡さんはいくらでもいるじゃないか、そういう意味を込めての発言がこれであった。丸岡さんのすばらしいいきざまに学ぶことは多い。が、苦しい思いの中から自分を語り、自分の立場を語っていく周りの友こそ私たちにとっての丸岡さんであるという認識である。

「私が本当にこの問題について考えだしたのは資料を読んだからではない。自分のことを話してくれたＹさんである。私にとっての丸岡さんとはＹさんのことなんです。」そういう言葉を何度か耳にするようになってきた。全体学習が進む中で「先生、資料の勉強をするのではなくて私たちの身の周りにある身近な差別について話し合いたい。」という意見が多くなってくる。資料を越えて身の周りの差別について学習することは直接的に今の生き方を問われることになる。資料だけの学習の方が「楽」なはずである。にもかかわらずそのような意見が出るようになったのは身近にいる丸岡さんを見たからであろう。

先生、私せこい……

私たちの取組みの中でそれぞれが一番実感したことの一つに「生徒と共に考えること」の実践的な意味がある。同和問題意見発表会の場で部落宣言をするというＭ子。宣言をしていく意味を本人と何度も話していく。学級の問題として取上げ、またＭ子を含む地域の問題でもあると考えて手学習会に参加する形で討論を深める。家庭はどうなのか、担任の後藤田先生は何度か足を運んだ。その中で母親の苦しい思いや、学校に対する不信感なども出されてきたという。「本人がその気なら発表させたい」という家庭での結論であった。そのような話合いがなされた次の日の先生の言葉である。宣言をしていこうとする子にたいしては担任と

しての共に取り組む姿勢があればそれでいいのだとも思う。

しかし、いろいろな不安はある。本人の本当の思いはどうなのか、担任として支え切れるのか、取り巻く周りの現状はどうか、そして家庭は。初めての経験の中で、教師としてというよりも一人の同じ人間として揺れ、悩み、苦しむ。そんな姿があった。それを乗り越えようとする思いがあった。

２年になるまでは１０分の８までは逃げ出したい気持ちだったけど今は１０分の７。１０分の１、ほんとに少しだけど私にとっては大きな進歩。

「学習会のことなんか聞かれるとドキッとしながら答える。さも、差別に負けていないかのように。けど、内心嫌われたらどうしようとか、無視されたらどうしようとか、差別されないかとひやひやしている。気持ちの１０分の７まではこのまま部落差別のことには触れたくないと思っている。２年になるまでは１０分の８までは逃げ出したい気持ちだったけど今は１０分の７。１０分の１、ほんとに少しだけど私にとっては大きな進歩だと思う。みんなのなまの声を聞いて私と同じだ、逃げてはいけないと思い始めた。みんな真剣に考えているのに私だけそっぽを向いていてはいけない。みんなの思いを聞いていると胸が苦しくなった。そういうことを感じることができたことは私にとっても大きなプラスになったと思っている。」これは昨年度終わりのＴ・Ｍの文章である。３年になって多くの全体学習を経験し、学習会において同じ立場の同級生と意見を交わす中で学級においてみずからの立場を堂々と話していくまでになってきた。Ｔは「地区外のこと結婚したくない」という。親の考えでもあろう。差別されることがわかっていて、わざわざ、苦労する必要はないという。また、「地区外の人が日頃の付合はともかく、結婚になれば反対する気持ちはわからなくもない」と言ったことがある。自分が地区の人間なのに、である。Ｔの弱さの表れでもあろうがそこまで考えてしまう差別の厳しさを改めて思いしらされる。

次はそのＴの「あゆみ」である。

「今日両親と部落のことについて話し合いました。こういう考え方なのかと思いました。今まで聞けなかったことが聞けて良かったです。お母さんに私が「部落でない人と結婚することになったらどうする？」と聞いたら「やめときな」といいました。私がつらい目にあうからだそうです。今の私だったらお母さんのいうように諦めると思います。友達とかが部落出身ならわかるけど、結婚になるとやっぱり…、みたいな考え方わかるから」

私に本当に人の気持ちがわかっていける時が来るのか不安な気がする

小学校の校区に地区を持たないM子の言葉である。気が強いが繊細で全体の場での発言は少なく、どちらかといえば我が❷な感じの子であった。地区外の子である。そのMが授業中に自分の思いを話そうとして絶句して涙を溜めた。
「私は今まで同和問題学習はあまり自分には関係ないと思っていた。けど、周りに真剣に取り組もうとしている人がいることがわかって、ごっつい自分でYさんやMさんなど支えていくことができるのかって思うし、今までの自分に腹が立ってきた。」。そして上記の言葉が続く。地区外の子にとって部落差別の問題は「とりあえず逃げようとすれば逃げられる」問題である。それを自分自身の問題、自らの生き方の問題としてとらえないかぎり真剣なかかわりは難しい。

自分は人の気持ちがわかっていくことができるのかという問いかけは、まさに自分の問題としてとらえ始めたということである。そのままでは同和問題の解決に結び付くものではないが、M子の場合は常に同和問題の中で考えていくようになるだろう。対象地区を持たない学校における同和問題学習の重要性と必要性が説かれるが、その具体的な切り込み方の一つのヒントがここにあるように思える。

友達を「売る」

いやな言葉である。聞きたくない言葉である。しかし、目を反らせてはいけない言葉でもある。何度も書いてきたが私たちの全体授業に魂が入ったのは、昨年１２月１３日の森口先生による全体授業からであった。その冒頭に次のような先生の話がある。

「非常に切ない話があります。あれだけバスケットをしたりソフトボールをしたりして楽しく過ごした仲間が中学校をでて上級学校へ行ったとき平然と仲間を裏切っていく、仲間を売る。ある高校の同和教育担当の先生からこんな切ないことがあったと数年前に聞かされたのです。違う中学校から来た友達に『あの子とあの子が部落の子でよ』とつげる。『あの家がそうでよ』と話す。そんな話しをすることで自分は部落の人間でないことを示していく。つい数か月前まで一緒に頑張っていたいたはずの仲間を売る。……」このような話しから始まった。板野中学校は４分の１を地区の子供が占める。今はいい。問題は卒業してからである。

そのような生徒を一人も出すまい。それは、消極的に見えるかも知れないが私たちの大きな目標の一つになる。本校の校区には３小学校がある。その内の一つは校区内に対象地域を持たない。そのため、家庭において中学校入学前にいろいろな「注意」がなされていると思われるふしがある。３年になってYが次のようなことを「あゆみ」に書いてきた。

『この詩（丸岡さんの「ふるさと」）を読んで、先生の話しを聞いて私は友達を売っていたと思います。西小学校の人には部落というのが無いので中学校に来て初めて知ったという人もいました。その人に「Ｙは部落？」と聞かれたときにすぐ「違う」って否定しました。部落と思われることがいやだったからそういう言い方をしました。私は差別をしていないといいながら、していたことになるんです。部落って聞かれたとき「私は違う」っていう言い方をしました。「私は違うけど、あの子は…」と友達を売った形になりました。』

卒業後に起こるかも知れないと心配していたことが、今目の前で起こっていた。部落の隣接の地区が一番差別が厳しいという。全体学習の中でもこの点についての子供たちの発言はなかった。目の前の事象をどのような形で取り上げるべきか。個人的にＹと話していく意外にどのような形で教材化していくかということが課題として残されている。

本当にそう思っているの？

「今日みんなの意見を聞いていて、自分がすごく恥ずかしくなった。前までの私の恥ずかしくなったというのは、部落の触れられてのことだったけれど今は違う。みんながあんなに一生懸命に考え発表しているのに私は下を向いて聞いているだけで、みんなの前でいうのが怖い。そんな自分が恥ずかしくなった。私は涙もろいから、みんなの前ではなしていると、つい涙が目に浮かぶ。私は自分が部落だということをみんなの前でいうことが怖い。何よりも恐ろしい。みんなの視線を感じるからだ。みんなすごくいいことを思っているけれど、本当にそう思っているのかな、と思うときがある。このまえの全体授業のときある子にすごく感心させられた。でも、あとで違う友達から「あの子みんなの前ではいい事言うけれど『部落の人とは結婚できん』やいよったんじょ」と言うことを聞かされて、信頼仕掛けていた子なのに信頼できなくなった。その子の本心だから仕方がないというか、私はまたみんなの本心がわからなくなった。でも、少しずつは変わってきていると思う。私も負けずに頑張る。」これは地区の女の子の全体学習の後での思いである。多くの部落の子が地区外の子の発言に勇気付けられながらも、このような思いを払い切れないでいる。この子は、それでも全体の場で宣言をしていく強さを身につけていく。

以上仁木の独断で今も心に残った言葉を綴った。全ての先生方の気持ちを聞くべきであったが時間的な余裕も無く一方的なものになったがお許しいただきたい。建前でない言葉は心を打つ。それを私自身のために残しておきたかった。

１０．思いつくままに

（１）手を挙げること

昨年度の終わりに一人の生徒が書いた次のような文章がある。

「今日は非常に緊張していつもと違うものがありました。手を挙げるのは勇気が本当にすごくいると思いました。最後に心に詰まっていたものをやっとのことで手を挙げることができました。そして今日も語ることができました。書いたものを読むだけでは相手に本当の気持ちは伝わらないと思いました。最後に手を挙げたものの手に鎖が付いているのかと思うほどとても重く思いました。自分の手がどうしてこんなに重いのかと思ったくらいです。そして、やっとという感じで自分の心の中でつまっていたものを吐き出すことができました。」

「自分の手がどうしてこんなに重いのか」と感じる思いはそのまま同和問題学習の重みであった。きれいごとから本音の話合いに入っていく関所としての手の重みである。

「本音で言い合ってみんなの頑張っている姿をみると、手を挙げて発表しなければという気持ちになり何か厚いものが込み上げてくるようでした。」

「三回くらい自分から進んで発表できました。物すごくドキドキして緊張して心臓が張り裂けそうでした。しかし、物すごくうれしくてたまらない気持ちがありました。」

「全体学習で発表できなかったことは、発表している人に答えられなかったということは、差別していることにつながるのじゃないかといわれて、ズキッときました。でも、そういわれても仕方ないと思えるようになりました。」

多くの子供たちが全体学習や学級の授業において「手を挙げること」について触れている。そのことはとりもなおさず「手を挙げていく」ことの意味をだれよりも子供たち自身が掴んでいるからに違い無い。大人の世界では発言すること以外にいろいろな行動によって－つまり実践によって－自分の思いを実現しようとすることができる。しかし、今の子供たちには手を挙げて発言するしかない。それしか実践の方法がない。だから「手が重い」と感じるのだろうと思う。

指名されれば誰しも自分の意見をいうことはできる。それぞれに自分なりの考えは持っている。その中から一歩踏み出して積極的に自分をさらけだし、自分の発言に責任を持とうとすることが「挙手」という形になって表れてくる。

挙手をしての発言は子供たちなりに責任を感じる行為である。だから、ある意味で慎重になる。それを打ち破る授業を創造していくことが我々のまさに実践でなければならない。「あの子はエエこというが、言うだけだろう。」という教師の発言がある。しかし、多くの場合それは発言させることのできない我々の言い

訳になっていることが多い。活発な授業を展開している先生からそのような発言はほとんど聞いたことがない。もちろん多くの生徒の中には十分な思いを持っていても発言のできない生徒は存在する。それはそれでよい。しかしそのことは一つのクラス全員に一般化すべきではない。

発言したことによって苦しんだ生徒がいる。「みんなが思うほど私は立派じゃない」と涙を流した。それでいいのだと思う。発言することによって初めて自分自身をみつめ考える機会が与えられたのだと思う。

そして何よりもそのような挙手をしての発言を引き出せるかどうかは教師のかける思いそのものにかかっているということがある。

「手が重い」と書いた前述の生徒は、今１８５名の３年生の中で最も積極的に発言し、しかも息の長い発言ができ全体のリーダー的な存在になっている。

（２）本音

「建前だけに終始している同和問題学習ではだめだ。本音で語ることから始めよう」。決まりきったように言われる言葉の一つである。

かってＡ中学校に勤務したときに訪宅研修に参加したことがある。地区外の人ばかりの集まりになったときにはまさに「本音」がでる。いわば言いたい放題の状態であったといっていい。そこに地区の人が一人加わればまったく状況は違ってくる。　それでも「本音」の語り合いがスタートになるべきなのか。本音はそれが必要な状況の中でだされていかなければならない。それが私たちの一つの結論であったように思う。

昨年１年間全体学習で子供たちの口から本音がでることはなかった。それが今年になってでた。昨年来のいわば伏線があったとはいえ全体の場で「一つ間違えば差別発言」と受け取られかねない発言があった。佐野先生の「傷跡」の授業の後の森口先生の全体授業のときである。（これについては全体授業記録の中におさめられている）

「私の父や母は、おまえが部落の人と結婚したら家の血が汚れる。そう言うんです」意を決したようなＡ子の発言であった。Ａ子の家庭は家族仲良く何でも話し合うことができている理想的な家庭と言ってよい。学校での同和問題学習について家庭で話し合っているときの家族の発言である。（この問題を家庭の話題とできていくことでもＡ子の家庭の状況を掴むことができる。現実には話し合われないことの方が圧倒的に多い）それを全体授業の中で話していった。

地区出身の生徒にしても実態的な差別を受けたことは少なく「もう差別はない」と感じていたものが多かった。それだけにこの発言は大きな衝撃を与えた。

「今日の全体授業で『私と部落の人が結婚したら？』と、それで『汚いから、

いやらしいから』と。僕は思わず手を挙げ『なぜ？部落の人はそんな人ばかりなのか？汚い、いやらしいとはどういう意味なんだ』ということをききたかった。が、手を挙げることはできなかった。」

これはその後の一人の地区出身の男子の「感想」である。それ迄はないと思っていた差別の実態がはじめて明らかにされていった発言であった。この発言をきっかけにして初めて「本音」の話合いの場が持たれるようになる。

「本音」はこのような形ででてこなければならない。この発言でA子を責めたものは一人としていなかった。それは、A子が父母の発言を肯定する立場で話していったのではなく、大好きでたまらない父母の気持ち－明らかにおかしい父母の気持ち－を否定しつつの発言であったからに違いない。誰しも自分の差別心を話すことはできても自分の肉親、まして敬愛して止まぬ両親の差別心をどこまで全体の場で話していけよう。自分のことであれば話すことができても両親のことになれば絶句してしまう姿を私たちは多く見てきた。

A子は自分や両親の本音の部分にあるある差別心を乗り越えようとして「本音」の発言が生まれた。だから、地区出身の子を初め全ての同級生に受け入れられ、本当の同和問題学習のスタートの一つとなっていったのである。

「本音」の語らいは自分の本音にある醜い部分を自覚し、見据えてそれを乗り越えようとして始めて意味を持ってくる。その意識の無い本音の出し合いは、慰めあいにおわるか、「差別心の確認」に終わりかねない。

（３）全体学習から学んだこと

○　全体学習についての成果や反省については、全体学習の項に書いてきた。ここでは私たちの全体学習にかける思いのようなものを書いて見たい。

全体学習はひょうたんから駒のような形で生まれた。初めから今のような形や成果を予想したものではなく手探りの状態の中から生まれてきたものである。同和教育の研究会を控えて何かをやらなければならないという気持ちをもって初めての学年部会をもった。研究授業を各クラスで持ちその授業記録を取ること、生徒の発表訓練のためにオリエンテーションを持つことまでは決まったがそこから先に進まない。「それじゃ、私が授業をして全クラスに見せるようにしてみましょうか」という森口先生の提案があり、ともかくやってみようということになる。オリエンテーションと研究授業をミックスしたようなものである。体育館に学年の全生徒をいれ授業をするクラスを他のクラスが取り囲むような形で授業参観をする。生徒にとっても私たちにとっても初めての形であり緊張の色があった。授業も事前に用意された学習プリントを読むだけに終わったし、授業後の全体授業も時間にして２０分あまりの形式的なものに終わった。

それでも、公開授業をした２Ｂの生徒はほぼ全員の生徒の発言があり、一つの満足感と成就感を持ったように思う。そのような形の中から今のような一歩前進した全体学習が生まれたのは四回目の全体学習のときである。

それ迄の全体での取組みに飽きたりなかった、そして差別に対する強烈な怒りを持った森口先生の全体授業に対する取組みで初めて生徒ははじかれたように顔を挙げていった。

その授業を契機にして全体授業に魂が入り同和問題学習が根をはっていった。全体学習からクラスへ、クラスから全体学習へと良き循環を繰り返すようになる。

○　生徒の全体学習を始めた頃に対する作文がある。

・　この二年間全体学習に取り組んできて良かったと思います。最初は２時間も椅子に座っているので「しんだい」とか思ったことがあったけどいまではもっと続けたいと思うようになってきました。ここまで気持ちが変わってきたというだけでもすごいことだと思います。それにこの全体学習をしているときが今までの中で一番自分自身を見つめられる時間であったし、それと同じにみんなの考えている今の気持ちが一番わかった時間でもありました。

・　初めて全体授業をしたのは２年生。みんなの前で授業をするというのは本当に恥ずかしかったです。こんなこといって笑われやしないか、などといった気持ちがたくさんありました。全体学習を始めたときはみんなの前でやるよりはクラスでいろいろ意見を言い合ったほうがいいんじゃないいかと思っていました。

・　私は２年生から全体授業をしてきて初めの時はなんでこんなことせなあかんのかなぁって思っていました。こんなことやったりしよったらよけいに意識してしもうて、今まで部落とか知らなかった人が知って差別するようになったら差別を増やすことになるんじゃないかなと思いました。

・　もし全体学習をしていなかったら今の三年生はなかったと思う。したのとしなかったのとでどれだけ違うかはわからないけれど、少なくとも私は全体学習をやる前と今とではかなり考え方とかが変わった。全体学習を実際にやる前、２年の初めにこのことを聞いたとき「めんどくさい」と思った。だけど何回かやっていて、ある子がみんなの前でないたとき私はショックを受けたというか、眠気がパッとなくなったみたいに頭がはっきりなりました。

ほとんどの生徒がこのように感じていた。ある先生は「私は去年１年こんなセレモニーみたいなもんして何になるん！」と思っていたという。

どの生徒も同和問題学習というときクラスの授業よりも全体学習を思い浮かべそこで成長した自分を語る。全体の場であれだけ本音が出、同和問題につい

て真剣な話合いがなされたのはなぜなのか。

○　どのような場合でもこの方法が成功し成立するのかという問題がある。一つは強力な教師のリーダーシップが必要である。一人でもよい。その一人が真剣に取組み生徒に訴えれば必ず生徒が動く。

ある生徒の作文がある。「中２の時の最初の全体学習の時は本当に授業の周りで聞いていても何か逃げ出したい気持ちで一杯でした。本当に本当に部落出身という自分がいやでした。友達にも隠そうかと思っていたけれど先生の熱心さを見て引き付けられるものがあったと思います。それは今初めてずっとずっと思っていたことを書くけれど今まで担任してくれた先生は部落出身ていう先生ではなくて、だから私はただ口先だけで、差別はいけない、といっているのだと思っていました。でも先生はただ口先で言っているのではなく本当に心から言っているのだということがわかりました。みんなも私と同じだろうと思います。だから全体学習が段々真剣に取り組めるようになったのだと思います。」

その生徒が他の生徒を動かし教師を動かす。極論すれば一人の生徒が学年全体を動かせることがある。クラス単位であればそのクラスにのみ留まるものが一度で学年全体に影響をおよぼすことができた。全体で取り組むことによって分散していた部落の子供たちが一つになることができる。割合は変わらなくとも絶対数が多くなるということこそ一つのポイントであった。部落宣言一つを取ってもそのことがいえる。全体の場で発言できることがすばらしいというが、むしろ全体の場であるからこそ発言することができるという側面があることを初めて教えられた。

○　他の大きな要因は学年教師団の連帯である。これについては説明の必要はないだろう。教師が真剣な取組みを見せれば子供たちは必ずついてきてくれる。私たちの後押しをしてくれるようになるものである。

○　さらにいくつか生徒の作文の一部を挙げる。

・　３年生になる前あたりではもう全体学習が自分の誇りになったというか、どんどん発表していくみんなをもっと他の人に見てもらいたくて、自分もそのなかの一人だということがやたらうれしく思っていました。そういえば支え支えられるっていうけど、同和問題学習をしてきて本当によくわかりました。２年の最初手を挙げるのをためらっていたとき、一番最初にある女の子が手を挙げたので私もそれから平気でてを挙げることが出きるようになったのです。その子は自分では私の支えになってくれたことを知らないだろうけど、きっとこういう事は毎日繰り返されていて今の私たちがあるのだと思います。

・　私は自分が部落出身だということは今も前もあまり気にしていないつもり

だったけど、もし全体学習をしてなかったら高校に入って部落差別をされたとき立ち向かっていけるかどうかわからなかったと思います。周りに受け止めてくれるような人がいなかったら自分が部落出身だということを隠していこうとしたかもわかりません。全体学習をしてきたから今までわからなかった自分の気持ちや人の気持ちが少しずつわかっていけるようになったような気がします。

（４）全同教大会に参加して

第４３回全国同和教育研究大会に参加した。多くの事を学んだがその中でも印象に残ったいくつかについて述べてみたい。

①「あんなんしているこの親はどうしてんのかな。」

という周囲の親の声があった。地域懇談会や家庭訪問の中でこのようなつぶやきを聞くたびに私は

「子供の事を心配していない親はいない。」

といつも返した。

「あの子なんとかなりませんか。」

と、周りから言われるたびに

「ハイ、すみません。おこっときますよって。」

といいながら、

「やかましいわい！」

と心の中で叫んでいた。　　（特別報告より）

今、本校にも多くの問題を抱えた子がいる。遅刻や服装違反その他眉をひそめる行為も時に見られる。Ｈは小学校時に父母が離婚した。父と祖父母弟の４人で暮している。母親とは中学校に入学して以来会っていない。生活は裕福ではないが集金がとどこおることなどはなく安定している方である。ただ父親は定職はなく時々出稼ぎにも出る。父親が京都へ出稼ぎにで、長期に家を留守にしだした頃から生活に乱れが見られるようになってきた。遅刻が多くなる、授業のエスケープが目に付く、という具合である。何度か家庭訪問をし話し込むことも多くなったが大きな変化が見られないまま日が過ぎていく。しかしクラスにおける友人関係はすこぶる良く教室に入ればだれとも仲良くできていくようであった。成績はふるわないが優しい心根が見られる豊かな文章を書くことのできる子であった。全体学習である部落出身の女子が涙に詰まって言葉を失ったことがある。

「Ｍさんが泣いたとき僕は『泣くな！』と思った。でも、聞いていて『泣い

てしまうよな』と納得した。だけどみんなはどう思っているかしらないけどMさんの後YさんやEさんが泣いた。僕はそれがいやだった。YさんやEさんがいやなのではない。あの涙がいやだった。僕はMさんの事を思っているのだったら『Mさんが泣いたのなら、私はあの涙をむだにしないように、私が泣くのはよそう。』そう思ってほしかった。」

これは次の日のHの「あゆみ」である。そんな彼だったが行動はなかなかに改まらない。「Hよ、おまえは友達とも仲良くできるし、クラスのみんなもHの事好きなんじゃけん教室で授業受けるようにせないかん。」という私の言葉にたいして、一言「あいつらになにがわかるんな」とつぶやく。それは同時に担任としての私に向けられた言葉でもあっただろう。何かがまだまだ抜けている。そんなときの「特別報告」であった。

周りの者にたいして「やかましいわい」と言えるだけのかかわりができていないことを思いしらされた。何もかも包込み、同じ視点にたって関り切ることができていないということである。

② 同じ特別報告にある。

……やっとの思いで一人の友達に部落出身であると打ち明けることができたというものであった。その友達は

「そんなん、関係ないやん。気にしていないよ」

と言ってくれて、ホッとしたというのである。

私は無性に悔しかった。何でこの子らがここまでビクビクせなあかんのや。

その友達が

「私も差別おかしいと思う。なくしたいと思う。」

と、言ってくれたらどんな力強く思ったやろかと。

一人の友の部落宣言にたいして「ほんなん関係ないでえ、A子ちゃんはA子ちゃんじゃ」という受け方は多い。そのことを二人ともおかしいとも思うこと なく、また私たち教師も同じことであった。むしろ、「関係ない」と言い切れる子供たちでなければならないと考えていたのである。

次は3年生の授業記録の一部である。

「私はKさんに言いたいんです。私は前に『私は部落なんよ』と言ったでしょ。その時Kさんは『そんなん気にせられんよ。部落とか関係なしに私の友達じゃわ』と言って私を勇気づけてくれました。……」

考えて見れば私たちも子供たちも部落差別が社会的な問題であることを忘れていた。二人の間で「関係ないよ」と言ってすませておける問題ではないということに気がつかなかった。それですむ問題であれば事は簡単である。

子供たちは今、目の前にいる友達を見ながら考える。「あの子と遊んだらいかん」そういう現実がまだ確かに存在する。そのなかで「関係ない。私の友達だ」と全体の場で言い切るのは一定の進歩であるかもしれない。しかし、それではこの問題は解決しないということをしっかりと認識しておく必要がある。友情とかいった個人の関係に埋没さてはならないのだということである。友達であろうがなかろうが差別を許さないという視点を明確にしなければならない。教室における授業では、部落の歴史等の資料を通して学習する場合には社会的な認識の面は強調されてはいるが、それが身の周りの差別事象と自分との関りになったとき、途端に個人的な関係の中に埋没されてしまうという危険性を持っている。

③　社会認識の分科会に参加した。全国の多くの先生方の発言が続いた。そのほとんどが部落出身の先生方である。その時に京都の解放同盟の方の発言があった。「同和教育がほとんどの場合、差別を受けてきた子供たちのつらい、苦しいまた怒りを込めた発言からスタートしている現状がある。さきほどからの先生方の発言を聞かしてもらっているがそのほとんどが出身教師の方である。同和問題学習の教材に使われている資料も大半が差別を受けてきた歴史や差別を受けている現状についてのものが多い。なぜ、子供たちがつらい涙を流さなければ同和教育ができていかないのか。なぜ、差別者の側の資料が教材とならないのか。」

そのような趣旨の発言であった。

私たちの同和問題学習を振り返ったときにまさにこのこと場がそのままに当てはまる。既に述べてきたようにここまで全体で考えることができるようになったのは一人の先生の怒りと悲しみであり、それを受けた生徒の涙であった。多くの生徒がこの時の全体授業から真剣な取り組を見せるようになってきた。まさに「部落の子のつらい涙からスタートした」同和問題学習であった。
そこまで突き詰めていかないと真剣に自分の問題として考えることができていかないという差別に対する認識に問題がある。それは主として私たち教師についていえることである。

今、このことに対する具体的な方法は思い当たらないがこれから同和教育に取り組むときの一つの基本的な姿勢として刻んでおきたい。

（５）家庭で

同和問題学習への取組みが真剣になる中で子供たちは家庭の様子を毎日の「あゆみ」のなかに書いてくるようになってきた。今まで表面に表れていなかったものが出て来るようになった。見えていなかった差別の一面が姿を表す。３年Ａ組

の生徒が書いてきた「あゆみ」を２例紹介する。

● 今日も父さんと部落の話しをしました。もう私、父さんと話しができません。自分の事を思いっきり話しても絶対わかってくれません。もう、自身をなくしました。あれだけ、約１時間以上話してもやっぱり悪いイメージを持っています。「私が結婚するとき部落の人だったら反対するで？］と聞くと「100パーセント断る」と言われ、「そんなに部落の勉強したかったら高校やいかんとこの勉強していけだ。そのかわり県外いけよ。」と言われました。それだけ言われると黙り込んでしまいました。何か悪いことをすると同和の人間とか決めつけます。だから、私はこう思う心を直していかなあかんと言っても「父さんは昔からよう見てきたけん、ようわかる」と言ってます。とうさんもこのまま同和の問題をしていかんかったら、いつかはなくなるという考えを持っています。父さんが「こんな勉強しいまわるけんなくならんのじゃ。学校は何教えよんな。」と言われ、涙が出そうになったけど「嘆くことより怒ることだ」という言葉を思いだして涙は流しません。このまま泣いてばかりするとなんのために勉強してきたかわからないから。でも先生このまま父さんに言ってもむだと思うし、もーケンカでした。之でもやっぱり話していったほうがいいいですか。もーどうしようか迷っています。でも今の私の気持ちは、もしかして部落差別はなくならないかもしれない、でも諦めてはいけないと思う。発表して発表して努力するのが人間の生き方だと思う。この同和問題学習は一日中でもやりたい。頭の中がすごくいたいけど命にかかわる問題と聞いて、初めてみんなに発表出来てうれしい。いつも教室では小さいけどこの問題の時は輝いていたい。

● 今日は家で部落差別に出会いました。家庭の事だから書いたらいけないのかもしれないけど先生に聞いてもらいたいです。今日は父がいなくて弟と私と二人の祖母の４人でした。なんだかしらんけど結婚の話しになって私の好きな子の話しになりました。祖母が「家どこな？」と聞くので「すぎそこじゃ。ここからも見えるわ」と言って挙げました。先生にも私の好きな子がわかったかもしれないけどまあいいです、そんなことは。うちの家は隠し事なしでとてもい家庭だと思います。。ここの家に生まれて幸せです。このまま私の好きなこの話しで盛り上がるはずでした。でも祖母は弟に聞こえないように顔をしかめて「えー、ほな部落でないん…」と言いました。私はなんとも言えないショックを受けました。すぐに「そんなこと言うたらいかんわ！」と叫びました。しかし祖母二人は「あそこは気つけとれよ」「危ないぞ」「いかんでよ」とすごい差別の言葉をどんどん言いました。私は怒りました。でも弟がそばにいるので何も言えず「もうしらん！」と自分の部屋に帰りま

した。私は悲しい気持ちと怒りとあきれた気持ちと部落の人への申し訳ない気持ちで一杯になりました。私は弟がこの問題を習い始めたらきちんとしたことを教えて、祖母二人と闘っていこうと思います。弟に祖母たちが変な間違ったことを言う前に私がそうしなければいけないと絶対に思いました。

このような発言や会話はいままで多くの家庭で見られたに違いない。それらが子供達の心を素通りしていた。それが、、同和問題学習を続ける中でひっかかってきた、そういうことだろうと考えている。もちろんこれをそのままにしておいていいということではない。担任の先生から学年教師団に紹介があり本人とも話合いの場を何度か持った。その時点ではできなかったこれを是非とも教材化したいと考えている。いや、今の板野の子供たちにこそ教材化し、共に考えていかなければならないことだろうと思う。結婚差別の芽というか、結婚差別そのものが出てきているわけである。

担任の先生はこの問題を学級に返していっている。学級に返す中から生徒と共に考えていこうとした。

「私も家で両親が部落に対する悪口をいっているのを聞いてそれに反論しようとしたがだめだった。でも、先生からＨさん、Ｉさんの事を聞いて、私だけじゃない、みんな頑張っているんだということに気がついた。私に勇気を与えてくれた。」

これは同じ学級の他の生徒の「あゆみ」である。それをまたＨやＩに個人的にも「あゆみ」を通じて返していく。

（上記の「あゆみ」を転記した後で）

「……。ある子がそう書いてきた。Ｈさんが私に勇気を与えてくれたって。先生、Ｈさんが、教室では小さいけどこの問題ではいつも輝いていたい、いつまでも…という言葉にじ～んときた。事実昨日のＨさんは光っていた。みんな、そして先生に輝きを与えていた。先生はそんなＨさんの心の底まで、この問題で繋がりあえてとてもうれしい。これからもつながっていたい。お母さんの事とかあって、なんかＨさん一回りも二回りも精神的に成長した。先生も一緒に頑張るけんね。」（Ｈに対する担任の返事から）

家庭同和の中心になる子供を育てる、といわれる。学校での取組みに比例する形で家庭における問題点が見えるようになって来る。「家庭における…」ということを意識せずともそうなってくる。

私たちはそれをどう取上げ教材化していくかという大きな問題が残された。これらは個々の担任に任されることではなく、学年はもちろん学校全体で、さらにＰＴＡへの働きかけの方法を考えるなどする必要がある。

（6）先生

同和問題学習を続ける中で常に心の中にあったのは「先生はどうなんだ！？」という暗黙の子供たちの問いかけである。私たち教師に問いかけた幾つかの子供たちの言葉がある。

○　『はっきり言って先生も私は疑っている。口先だけっていう感じがしたからだ。綺麗事なんかいらないから自分の本当の心に思っている言葉を私たちに聞かせて欲しい。』

これは昨年度後半になって担任の先生に提出した「あゆみ」の一部である。これを書いたＫ・Ｔは３年になって大きく成長していく。差別に対する激しい憤りを持ちながらも全体の場での発言はみられない状態が続いた。教師に対する不信感と友達に対する不信感があった。上記と同じ日の「あゆみ」に『「自分は最初差別していたけれど、もうこれからはしません。」っていう声は小６の時何度も聞いた。聞きあきたぐらいだ。口先だけの綺麗事ならだれでも言える。』と書いてきている。いわば、同和教育そのものに対する不信感である。教師に対する不信はその教師個人に対するに留まらず、同和教育そのものに対する不信につながっていく。私たちはＫ子が被差別の立場からの本音を担任にぶちまけたところに私たちの同和教育に対する一つの進歩を見た。今まではそのような声さえ反映させることがなかったように思う。３年になり何度か全体学習の場での発言が見られるようになってきた。それは昨年度の担任に引き続いて今年の担任の自己をさらけ出した授業のもち型にある。教師が自分の差別心をさらけ出しそれを洗おうと苦しむ姿を見せていかないかぎり同和教育は一歩も進まない。

○　『Ｎ先生が自分の本当の気持ちを言ってくれたことが本当にうれしかった。先生も一緒に生徒同じ位置から出発するのはすごく大切なことだと思った。先生だからと言って上から生徒を見るのはいけないと思う。なんでもわかった風な先生には生徒はついていかないと思う。Ｍ先生に先生の中にも差別をしている人が居ると聞いたときすごく腹が立った。そんな先生は生徒までも差別していることになる。先生はそんなんじゃだめだと思う。そんな先生なら勉強も何も教えて欲しくない。完璧な先生（大人）はいないと思うけど、ほなけど自分の生徒ぐらい、きちんと捕まえられないでどうする。学校も何か信じられなくなってきた。だから３年生の先生にはそんな先生にならないで欲しい。生徒から信頼されないような先生にならないでほしい。生徒を悲しませるような先生なんかいらない。だから先生たち頑張ってください。お願いします。先生たちももっともっと頑張らなければいけないと思います。先生に負けていられない

しね。』

子供たちは教師を信頼したときに教師に対する本音をぶつける。同和問題学習は教師の本音がためされ場である。しかし、気後れすることはない。一緒に頑張ろうとする姿勢があればよい。子供に教えられるということを実感としてつかんいでいくことのできる感性があれば、共に考えていくという姿勢があればと思うのだ。

○　県中学校同和教育研究大会が終わったあとの地区生徒の感想文の一部である。『…今日昼からの発表のため武道館にいくとき、女の先生から声を掛けられた。「感動しました」と言ってくれた。僕は「学校に帰ってからも同和教育頑張ってください」と言った。あとでもっといろいろ話しをしたら良かったと思った。でも多くの人の心が動いてくれたのがうれしい。こう言ってくれる人たちは学校に帰っても頑張ってくれると思う。僕も人任せにならないように頑張っていくつもりです。』

教師という職業の人に対する子供たちの思いは熱く大きい。この３つの「あゆみ」は私たち教師に対する子供たちの思いの段階を示しているように思える。“教えるとは共に希望を語ること”という言葉がある。これは同和教育にそのまま当てはまる。共に希望を語るとは思いを共有することである。共有できないかもしれない、しかし共有しようと苦しむことである。これが「被差別の立場に立ちきる」ということかもしれない。私たちはもっと子供のまえに自分をさらけ出してよいのではないかと思う。さいごに３ＢのＭの文を載せておく。

○『以前から将来の夢の中に学校の先生になりたいというのがあった。今思うと今までは普通の先生に憧れていたんだと思う。でも、今は違う。先生になりたいという夢は同じようにあるが同和問題に必死に取り組んでいく先生になりたい。この思いは３年生の先生方を見ていて思うようになった。僕は同和問題に必死に取り組む先生方や周りのみんなの姿を見ていてうれしくてたまらない。もし同和問題の学習がなかったら自分を語ることも自分をさらけ出すことも、自分が部落に生まれたことを誇りに思うこともなかったと思う。僕はこの学習の中で自分の意見も思いっきり表現できるし語れるようになった。僕が３年の先生方に同和問題に関る生き方を掴ませてもらったように、いつか学校の先生になって、人間として同和問題に関ってどのようにいきていくかを生徒たちに語っていくことができるようになったらなあと思う。その日を目指してこれからの一日一日を誠実に精一杯いきていきたい。』

生徒との交流いっぱい

昨年の活動を2冊子に

板野中学
2年部会

板野郡板野町大寺、板野中学校（漆原都夫校長、五百八十七人）の二年部会（十教師）はこのほど、昨年度一年間にわたって編集した学年通信と同和学習の授業記録をまとめた冊子を発行した。漆原校長は「両冊子とも教師と生徒の自主的な取り組みから生まれた。先生方の情熱には頭が下がる」といっている。

板野中学校２年部会が発行した学年通信「ねんりん」と「峠を越えて」

学年通信は、学校・生徒・保護者を結ぶ架け橋にするため昨年四月九日から「ねんりん」のタイトルで編集。B5判の大きさで休日を除くほぼ毎日発行し、二年生全員に配布。既に三百号に達している。

内容もバラエティーに富んでおり、肩ひじ張った教育論やお説教の類も一切ない。

生徒の作文、あゆみの紹介のほか、授業や教師への感想、独り言などが数多く取り上げられているほか、教師のコメントも語られている。

また、保護者からの意見、感想や「子供たちの学校生活が手にとるように分かった」「毎日、子供が持って帰るのを楽しみにしている」などといったメッセージもあり、「ねんりん」が学校と家庭との連携を深めるうえで果たした大きな役割をうかがわせている。

一方、同和問題学習の冊子「峠を越えて」（B5判、百八十二ページ）は、学習指導案や授業記録をまとめたもので、全員で考えることを狙いに取り組んだ学年公開授業のもようを詳しく報告している。

漆原校長は「学年だよりは各校でも発行しているが、年間三百号も出た例はないのでは…。また同和問題の授業も研究・実践の第一歩として意義深いものがある」と高く評価している。